

② 『わび助』

白滝山を北に抱えている所為で冷たい北風を遮ることは出来たが、先ほどからざわざわと木々が騒がしいのは、どうやら雪の前触れのようなのだ。

ぶ厚い黒雲がしだいに空を埋めて、まだ七つ(午後四時頃)を少し過ぎたばかりだと云うのに、辺りは日暮れのように暗かった。

百ヶ日の法要が終わり、利之助の両親や親せきの者たちが皆引き上げた座敷には、ミチとミチの父由永、それに、ミチが嫁に行くのと入れ替わるように生まれた弟の多門次が残った。

由永はすっかり冷たくなった茶をゆつくりとすすり、ミチに向き直った。ミチを見るその眼にはある種のためらいが見える。

利之助の死後、笑顔も、話すことさえも忘れてしまったミチが不憫でならなかった。この話は、今のミチにはひどく残酷に思える。それでも、話が有って残ったのだ、話しておくなくてはならない。

由永は、殿の命令で長府藩々邸に出仕する事になったこと、十日後には住み慣れた田耕を払うこと、下働きの五助をミチのために残して行くことなどを話した。

ミチの顔に一瞬驚きの色が浮かんだが、再びそれまでの抑

揚の無い顔にもどると、両手を膝の前について「おめでとうございませ」と頭を下げた。

利之助ばかりか、父、母それに弟達まで、みんな居なくなってしまう。ミチは、胸の中を蕭々と風が吹き抜けてゆくのを感じた。

五助は十日後に由永が長府に赴くと、着替えが入った風呂敷包み一つを下げてミチの所へやって来た。

農具置き場と牛小屋を兼ねている別棟の屋根裏にその荷物を置くと、早速田畑の見回りに出て行った。明日からの仕事の段取りを考えているようだ。

ミチが物心ついた頃にはもう五助は家に居たから、とつくに五十は越えた年寄のはずだが、肩幅の広い偉丈夫な体つきは年齢を感じさせなかった。

その後ろ姿を見送りながら、ミチは少しだけ気持ち安らいだ。

ミチは、来る日も来る日も縁側に座って過ごした。目の先には、大人の背丈ほどのわび助が白い花をつけていた。

利之助のもとに嫁いで十日余りが過ぎた頃だった。ようやくお互いの垣根が取れかかったある日、夫は何処からか一本の苗木を抱えて帰ってきた。

わび助だと言った。そして、派手ではない白い可憐な花が、

思慮深げでミチのようだと、と言った。

そう言われたミチは、顔を赤らめながら、どんな花なのかしら、とまだ見ぬ花の姿を想像してみた。

どんな花が咲くのか楽しみをしていた花が今咲いている。その木の傍に、わび助を植えながらミチを振り返って微笑んだ利之助の姿が見える。

昨日もそうだった。一昨日もそうだった。庭のわび助の傍には、いつも利之助の姿が有る。

新しく年が変わってひと月が過ぎた。わび助の花はとづくに終わっていたが、今日もミチは、利之助に会いたくて縁側に出た。

空気はまだ冷たい。それでも、降り注ぐ陽の光は、梅の蕾を開かせるには十分だったようだ。何処からか微かに甘い香りが漂って来た。

ミチは思ったって外に出た。外をこうして歩くのは何か月振りかしら、と考えながら実家へ向かった。毎年いい香りでお家が包んだ梅の木が思い出されたのだ。

二町余りを歩いて、生まれ育った実家の前に立ったミチは、分かってきた筈なのに、今初めて知らされたような衝撃に身を固くした。

板塀の中で梅の木を見上げている人は、全く見も知らぬ人だった。

よろめきかけた体をやっとの思いで立て直して門の前に

立つと、見慣れた実家田上の門札は他人の名に変わっていた。

実家が消え失せた。そんな喪失感に襲われたミチは、来た道を取って返すと荒々しく座敷に駆け上り、箆笥から利之助の着物を引き出した。

今すぐ利之助に会いたい。ミチは次々に着物を引っぱり出しながら利之助の匂いを探した。

すると、引き出しの底から、綴じられた紙の束が出てきた。不審な面持ちでその紙をめくったミチは、胸を突き上げる衝撃に目が眩んだ。

あれ程、ミチの誘いを、わしの柄ではない、と拒み続けたのに、利之助の文字で俳句がいくつも書かれていたのだ。

「燕来る畔のむかふに・・・」
最後の一句は残りの五文字がまだ決まっていな。でもミチにはすぐに分かった、昼餉を届けるミチを詠もうとしたものだ。

いつの間に、いつの間に。

ミチの胸の中に、悲しみではない何かが、むっくりと立ち上がる気配がした。利之助に恥ずかしい、そう思ったようだった。